

書評・紹介

Charles Willemen, Bart Dessein, Collett Cox

Sarvastivāda Buddhist Scholasticism

福田 琢

説一切有部 (Sarvastivāda) の文献は、インド仏教思想の展開を考えるうえではもちろん、部派分裂史の解明、写本の解読といった様々な研究分野に必須の知識を提供する。しかし「仏教の煩瑣哲学」(Buddhist Scholasticism)とも表現されるその複雑な教義体系は、専門家にとつてさえ容易に理解しうるものではない。また欧米においては、主要テキストがほとんど漢訳でしか現存しないという状況もおおきな障害となろう。ゆえに従来の研究成果を踏まえた適切な概論と文献案内の存在が欠かせない。その意味で、この本はより「東洋学ハンドブック」(Handbuch der Orientalistik)の一冊として、新たな有部の概説書が登場したことを、まずは歓迎しておきたい。本書は、有部の歴史的發展の過程を概観し、現存する主要文献に基づいてその教義内容を考察した英文著作である。

本書は三名の研究者による共著である。執筆分担については

明記されていないが、Willemen 博士の緒言 (Preface) から察せられるところでは、同博士による監修のもと、大部分の本文執筆を Dessein 博士が担当し、第三章だけは Cox 博士の手によるものと思われる。Charles Willemen 博士 (Professor, Ghent National University) は「阿毘曇心論」の英訳 (*The Essence of Metaphysics: Abhidhammāṅgikāya*, Publications de l'Institut Belge des Hautes Études Bouddhiques, Série Études et Textes 4, Brussel, 1975, 筆者未見) や『法集要頌經』の英訳 (*The Chinese Udanavarga*, 以下に略す) は本誌三一号に掲載された大窪祐宣氏の書評「および同二三号に掲載されたそれに対する Willemen 博士自身の反論を参照されたこと」といった有部系の漢訳文献の研究成果がある。Bart Dessein 博士 (Assistant Professor, Ghent National University) について筆者は多くを知らないが、本書の翌年に全三巻からなる『雜阿毘曇心論』の英訳 (*Samyakabhidhammāṅgikāya: Heart of Scholasticism with Miscellaneous Additions*, Buddhist Traditions Series vol. 33-35 Motilal Banarsidass, Delhi, 1999, 未見) を公刊されている。Collett Cox 博士 (Professor, University of Washington) は近年『順正理論』心不相応行論 (卷十一—卷十四) の英訳 (*Disputed Dharmas: Early Buddhist Theories on Existence*, Studia Philologica Buddhica Monograph Series XI, The International Institute for Buddhist Studies, Tokyo 1995) を上梓した。その序論はコンパクトな有部の概説書としてもすぐれており、筆者としては本書との併読をぜひとも推

奨めたい。

二

本書は序論と四つの章からなり、第一章、第二章が歴史研究、第三章、第四章が文献研究という構成になっている。紙幅の都合でごく簡単な要約になるが、以下その内容を各章ごとに紹介し、続いて筆者の所感を述べてゆきたい。

序論 Introductory Remark

説一切有部アビダルマは「小乗」とは称されるものの、内実はずぐれた哲学体系である。中国で毘曇といえは、実際は有部のそれを指す。また南伝アビダルマに比肩しうる組織的な論蔵を残している北伝の部派は有部だけである。

第一章 ダルマについて Chapter One: About the Dharma

第一節 聖典の編纂 *Compilation of the Canon* 一—一〇頁

仏教聖典の編纂は、仏滅（本書では紀元前三六八年）直後の第一結集における経と律の読誦より始まる。やがて部派分裂の時代に入ると、各部派は独自の経蔵と律蔵を伝えるようになる。

第二節 アビダルマ文献 *Abhidharma Literature* 一〇—一六頁

続いて論蔵が成立する。おそらく、まず『十上経』『衆集経』

のような分析的經典に基づいて三十七道品やマトリカーといったリストがつくられ、続いてそれらに注釈が施され、次第に各部派独自の論書へと発展していったのであろう。

第三節 有部アビダルマ *Sarvastivada Abhidharma* 一六一—三二五頁

Sarvastivada という名称はおそらく、この部派が自らの思想的特徴を端的に表現する目的で用いたものであろう。有部の論書群は、①素朴な經典注釈（『集異門足論』『法蘊足論』）、②組織的論述をもつ教義書（『施設論』乃至『発智論』）、③高度な論争書（『大毘婆沙論』）、④綱要書（『阿毘曇心論』系論書および『俱舍論』）という四段階に分類される。思想的な特徴としては、三世実有所（法の自性と作用）、刹那滅論（有為相実在説）、十二縁起説（三世両重因果）、因縁論（六因・四縁・五果）、修行道論（三賢・四善根・見道・修道）、輪廻説（中有実在説）などが挙げられる。

以上が序論と第一章の内容である。ここまでは導入部もしくは総説にあたり、内容的に詳しく検討しなければならない問題は見あたらない。なお最後の有部学説の概観は『雑阿毘曇心論』の本文を頻繁に引用しながら論述されているが、これはおそらく先に述べた *Dessert* 博士の『雑心論』英訳の成果を取り入れたものであろう。

三

続く第二章の内容は、本書全体の構成にもかわる、いわば本書の核心部である。

第二章 歴史と説一切有部 Chapter Two: History and Sarvastivāda

第一節 マウリヤ朝

The Mauryan Empire 三六一—九二頁

【1. General History】インドにおける最初の統一はマウリヤ朝によってもたらされ、マウリヤ朝は第三代アショーカ王(前二七〇—二三〇在位)の頃まで繁栄する。この時代背景は根本分裂の要因を考えるうえで重要である。

【2. The Synods of Vaisāh and Pataliputra】第二結集および根本分裂の原因をめぐっては、二つの主要な伝承、すなわち『ディーバヴァンサ』などの南方史料によるヴァーイシャーリー第二結集の記述と、『異部宗輪論』『大毘婆沙論』などに見えるパータリプトラ結集の記述とが伝えられている。

【3. The Second Synod of Pataliputra】パータリプトラの結集について伝える資料は有部系の教義文献が主であり、ゆえに根本分裂の要因を教義的な論争(マハーデーヴァの五事説)に求めようとする。しかしより信頼できるヴァーイシャーリー結集の資料によれば、アショーカ王時代、仏教圏の拡大とともに地域差あるいは生活習慣の違いといった問題が起り、もはやひとつの律を厳格にあらゆる地域の僧団に適用できなくなったことが、部派の分裂をもたらしたと考えるべきであろう。すなわち、中インド出身の比丘は戒律の規制緩和をめぐる提言(十事)を支持して大衆部を形成し、西方から南路を経てやって来た少数派の比丘たちはそれに反対して論争に敗れ上座部となり、やがて説一切有部などに分派していった。

【4. Sarvastivāda Tripiṭaka】有部の三蔵および雜藏

(Ksudrakapiṭaka) の細部を根本説一切有部所伝の対応テキストと比較してみると、根本説一切有部とカシミール有部が決して没交渉ではなかったことが明らかになる。概して根本有部のテキストは有部のものより古い伝承を保持しており、一方カシミール有部は六足論の段階的成立とともに独自の説を立ててゆくが、『大毘婆沙論』の時期を境に、再び根本有部説を導入するようになる。これは後代には根本有部が優勢になり、カシミール有部に影響を与えたことを意味すると思われる。

第二節 バクトリアとガンダーラ *Bactria and Gandhara* 九三—一〇頁

【1. General History】紀元前三世紀頃より西方バクトリアのギリシャ人たちによるインド統治が始まり、メナンドロス王時代(紀元前一五八年から一三〇年頃)に至るが、やがて月支に追われてインドに入ってきたサカ族によって没落する。

【2. Doctrinal Development】マウリヤ朝を倒したシユンガ朝時代には迫害を受けた仏教も、この時代には比較的自由な空気のなかで再びめざましい進展を見た。

【3. Darśanika, Sautāntika and (Mūla-) Sarvastivāda】この時代に有部から経量部が派生したと思われる。多くの資料によれば経量部は説転部と同一であり、また有部からは譬喩者という蔑称と呼ばれた。経量部説を採用する後代の『俱舍論』やそのヤショーミトラ注の記述には、細部において根本有部伝承と対応する記述が認められる。

第三節 カシミール *Kashmir* 一〇—二二五頁

【1. General History】 続いてカシミール有部の最盛期ともいえるクシャーナ朝時代に入る。とりわけカニシカ王（紀元後二世紀）は、インド仏教史上アショーカ王に比肩しうるほとんど唯一の人物であり、有部との関わりも深い。

【2. The Synod of Kashmir】 カニシカ王時代にカシミールで結集が開かれた。『西域記』やプトン史およびターラナータ史は多くの部派が参集したと伝えるが、事實は有部独自の結集であったと思われる。ここで根本論書としての『発智論』の權威が確立され、その注釈すなわち後の『婆沙論』の編纂が行われた。

【3. Doctrinal Evolution】 カシミールにおいて『婆沙論』が集成された頃から、『発智論』が「身体」であり、『集異門足論』『法蘊足論』『施設論』『界身足論』『識身足論』『品類足論』の六論書はそれを支える「足」であるという、いわゆる「六足・発智」の構想が生まれる（なお本項は、巻頭の目次では Vaibhasika Orthodoxy と題されている）。

【4. Conclusion】 以上の考察をまとめれば次のごとくである。マトウラーより発祥した説一切有部は、歴史的發展過程と地理的広がりのおかげで、おおきく二つの流れを生んだ。すなわちカシミールでは「六足・発智」の構想のもとに『発智論』注釈『婆沙論』が著され、一方バクトリアおよびガンダーラでは『心論』系綱要書が著された。カシミール毘婆沙師はクシャーナ王朝の庇護のもとに威勢を誇り、『雑阿毘曇心論』などの後

期『心論』系論書にも思想的影響を及ぼす。しかしクシャーナ朝の衰退とともにその力が弱まると、マトウラー以来の流れを汲むガンダーラ系有部は「経量部」と称して、カシミール有部の權威主義を厳しく批判した。『俱舍論』がこの時代の代表的な著作である。カシミール有部は経量部を「譬喩者」と呼んで異端視したが、やがて勢力関係は逆転する。そこで経量部は、自分たちこそ本来の有部学説の正統継承者であることを明示するために「根本説一切有部」と称し、七世紀から九世紀にかけて有部の主流の座に立った。すなわち「説一切有部」とは「譬喩者」「経量部」「毘婆沙師」「根本有部」を含めたひとつの総称である。

第四節 中国 *China* 一二六—一三七頁

【1. The Road to China】 仏教の中国伝来は、後漢の明帝（五七—七五年在位）の感夢求法説話に始まり、やがて渡來僧による仏典將來が盛んに行われるようになる。一四八年に渡來した安世高はアビダルマの造詣が深く、『阿毘曇五法行論』を訳出した。

【2. Abhidharma Studies in China】 四世紀末に僧伽提婆が『八健度論』『阿毘曇心論』、僧伽跋澄が『鞞婆沙論』『尊婆須蜜菩薩所集論』などを訳出した頃から、中国毘曇教学の歴史がいよいよ本格的に展開する。その後、玄奘の登場によって状況は一新され、以降のアビダルマ研究は『俱舍論』を中心に行われるようになる。

以上が第二章の概要である。このうち第一節の前半、すなわち根本分裂についての考察は、第一章と同様おむね従来の学説を踏襲したものであり、とくに新しい資料あるいは解釈が示されているわけではない。アショーカー王と部派分裂の問題については近年、議論の大前提となる「被僧伽」(samghabeta)という概念を上座部型と大衆部型の二系統として捉え直す視点から再検討が行われているが (Suzuka Sasaki, "Buddhist Sects in the Asoka Period" (1)-(7), 『佛教研究』一八、二二—二五、二七号、一九八九—一九九八年)、そのような成果が参照されているわけでもない。また中国毘曇教学史と学僧の系譜を略述した最後の第四節は、いわば付論である。そこで今は、本書の基本構想が最も明確に提示された第一節後半から第二節、そして第三節末尾の Conclusion に至る論述を詳しく検討してみたい。

ここで本書は、歴史的叙述と有部聖典の成立背景を探る考察とを交えながら、きわめて独創的な仮説を提示する。すなわち、マトゥラーに発祥した有部は、その本拠地を次第に北西へ移してゆく過程で、カシミールで独自の Vaidhasika Orthodoxy を確立した一派と、バクトリアおよびガンダーラでマトゥラー以来の古伝承を保持した一派という二つの大きな思潮に分かれていった、そして後者つまりバクトリア・ガンダーラ有部こそカシミール毘婆沙師から譬喩者と呼ばれた経量部であり、その経量部こそ後に根本説一切有部を自称した人々にほかならない、と主張するのである。

しかしながらこの仮説にはかなり疑問が多い。むろん問題は後半の「バクトリア・ガンダーラ有部が経量部であり、根本有部である」という部分である。ごく単純に考えて、この主張が成り立つためには、①「経量部とバクトリア・ガンダーラ有部の同一性」②「根本有部とバクトリア・ガンダーラ有部の同一性」③「経量部と根本有部の同一性」という三条件のうち、少なくとも二つが満たされなければならない。しかし本書はそれだけひとつとして満足に論証しえていないのである。

まず①経量部とバクトリア・ガンダーラ有部の同一性を議論するには、その前に未だ定説のない「経量部とは何か」という疑問に答えなければならぬ。しかしこの段階ですでに本書の仮説は揺らぎはじめ。なぜなら本書は「大毘婆沙論」の譬喩者説や『俱舍論』の経量部説、あるいは『順正理論』の上座説といった経量部研究の一次資料を具体的に考察することなく、もっぱら Andre Bareau や Jean Przyluski の古典的研究のみに基づいて経量部の概略を描いているからである。そして最近の研究成果は、紹介されることはあってもしばしば重要な論点が見逃されている。

若干の例を挙げておこう。女装訳『異部宗輪論』には「経量部、またの名を説転部 (Sankrantika)」なる部派が「諸蘊は前世より後世へ転位 (samkranti) する」と主張したことが紹介されており、かつてはこれが経量部に言及する最も古い文献と見なされていた。これに対して加藤純章『経量部の研究』は、「ここでの『経量部』もしくは『説経部』 (Sutrānavada,

Sutravada) が後の経量部 (Sautrantika) とは無関係であり、したがってその「諸蘊の転位」説も経量部や譬喩者の学説とは結びつかないことを明らかにしている (『経量部の研究』春秋社、一九八九年、一〇三—一〇九頁)。しかし本書はこの重要な指摘に触れず、伝承どおり経量部と説転部を同一視して「諸蘊の転位」説と経量部の三世実有説批判 (現在有体・過未無体説) とを関連づけようとする。その結果、次のように非常に奇妙な「経量部説」が再構成される。

「かれらの見解 (『諸蘊の転位』説) はヴァスミトラの学説 (三世実有説の正説とされる位不同説) ときわめて類似している。唯一の違いは、経量部は《時間は永遠不変であり、これ (諸蘊) はそこを通過してゆく》と考えるが、有部はその永遠不変なる時間 (eternal time) という着想を否定している点にある。さらに経量部は《(三世の) 時間区分とは (この永遠不変なる時間を) 通過する事象そのものが過去にあったり、現在にあったり、未来にあったりする点以外のものでない》とも主張する」 (本書一〇六頁、括弧内は評者の補足)

では本書が加藤教授の著作を知らないのかといえば、すぐ次の頁の「シュリーラータが世親の直接の師であることに異論はない」 (本書一〇七頁) という本文に対する脚注 (三七六) のなかで、典拠として「経量部の研究」と、本書評の冒頭で紹介した Cox の *Disputed Dharmas* が参照文献に挙げられている。ところが今度は、「異論はない」ところか Cox 教授が同書の

五一頁においてまさにこの点について疑念を呈している事実が省略されている。実は加藤教授本人も後に自説を修正したうえで「しかし、師弟関係になくても (中略) この二人は思想的にも個人的にも先輩・後輩として親密な関係にあったと思われる」と述べているのだが、むしろ本書には紹介されない (加藤純章「東アジアの受容したアビダルマ系論書」『成実論』と『俱舍論』の場合)。「仏教の東漸 東アジアの仏教思想 I」『シリーズ・東アジアと仏教』第二巻、春秋社、一九九七年、五九頁)。

さらに本書は、○₂ 教授が (加藤教授の研究に基づいて) 述べる結論を、そのまま経量部の定義として採用する (本書一〇九頁)。それは「経量部」という名称は、一定の教義的立場によって定義づけられ、あるいは限定されるものではなく、むしろこの基本方針 (すなわち三世実有説批判) に同意する人々それぞれの見解を包括する総称として、きわめて幅広い含みをもつて用いられていたと思われる」という記述である (*Disputed Dharmas*, p. 40)。しかしすでに見たように、本書は「経量部の三世実有説批判は、実は三世実有説とほとんど変わらない」と理解しているから、このうち「三世実有説批判に同意する人々が経量部である」という唯一の明確な規定が意味をなさない。したがってたとえ三世実有説を述べていても、何らかの点でカシミール毘婆沙師と異なる系統に属する有部テクストは、すべて経量部所屬である可能性をもつことになってしまう。

このようにして本書は「バクトリア・ガンダーラ系有部論

書」つまり『阿毘曇心論』『阿毘曇心論經』『雜阿毘曇心論』『俱舍論』そして『阿毘曇甘露味論』、さらには『入阿毘達磨論』までも経量部論書と断定する。しかし予想されるようにその論拠はまったく説得力を欠いている。たとえば「譬喩 (distanta) とらう語には経 (sutra) に対する補足」もしくはその解説とらう意味がある」(Jean Przyluski, "Darśanika, Sautrantika and Sarvasvādin" *Indian Historical Quarterly*, vol. XVI, No. 2, 1940, p. 250) を引用して本書は言う。『心論』系論書や『俱舍論』は、偈頌 (sutra) と散文による補足説明 (distanta) をもって論述されるから、まさに Sautrantika-Darśanika というチームを体现しており、ゆえに「経量部」と見なしうる、と(一〇八頁)。しかし Sautrantika-Darśanika などという語の典拠はどこにあるというのか。そもそも Przyluski 教授は、この対照的な意味をもつ二つの語が同じ文脈で同一学派に対して用いられたとは考えがたいから「譬喩者は他者からの蔑称で経量部は自らの尊称である」という有名な仮説を立てたのである。また、もし『心論』系論書がもとより経量部所屬であるなら、その構成および内容を踏襲する『俱舍論』は、なぜ改めて「経量部」説を導入してそれらを批判する必要があったのか。そして同じ構成を採用する『順正理論』はなぜ経量部所屬とは見なされないのか。次々におこるこれらの疑問に本書は答ええない。まして『甘露味論』『入阿毘達磨論』は数多くの阿含經典を引用しているから「経量部」であるという主張に至っては(一〇八頁)

もはや論外であろう。

続く②根本説一切有部とバクトリア・ガンダーラ有部の同一性についても、論証らしい論証は見いだされない。根本有部については、かつては有部と別個のマトゥラー教団と見る説もあったが (Erich Frauwallner, "The Earliest Vinaya and the Beginnings of Buddhist Literature" *Serie Orientale Roma* 8, Institute Italiano per il Medio ed Estremo Oriente, Roma, 1956) 今ではおおかた有部からの分派、あるいは有部の一系統と見なされているようである。いずれにせよ多くの資料が、根本有部と(一般に有部発祥の地とされる)マトゥラーとの結びつきを示唆する。またその名称は「自分たちこそ本来の有部である」あるいは「有部の源流である」という、カシミール有部への対抗意識に基づく命名であろうと考えられている(静谷正雄『小乗仏教史の研究』百華苑、一九七八年、一五六頁)。

本書はこれらの成果に基づいて「根本有部はカシミール有部とは別系統の有部であり、マトゥラー以来の古い立場を継承している」と考える。そして有部(カシミール有部)と根本有部の関係を考察するための参考文献として、Schmithausen の二篇の論文を紹介する。それによれば、『大毘婆沙論』などの玄奘訳有部アビダルマ論書や『俱舍論』注釈書の記述(念処や他心智などの解説)には、根本有部の伝承に基づく改変の跡が認められるとらしい (Lambert Schmithausen, "Beiträge zur Schulzugehörigkeit und Textgeschichtliche Kanonischer und Postkanonischer Buddhistischen Materialien" Heinz Bechert

ed, *Zur Schulzugehörigkeit von Werken der Hinayana-Literatur*, Symposien zur Buddhismusforschung, Vandenhoeck & Ruprecht, Göttingen, 1987) (本書七七一七八頁)‘また『俱舍論』および『順正理論』には根本有部の阿含(チベット訳と同じ系統の『ウダーナヴァルガ』)が引用されているともいう(Schmithausen, “Zu den Rezensionen des Udanavarga” Archiv für Indische Philosophie, *Wiener Zeitschrift für die Kunde Süd und Ostasiens*, XIV, 1970) (本書九〇一九一頁)。本書の理解にしたがえば、これらの資料は、根本有部の古い伝承から独自の発展を遂げたカシミール有部が、『俱舍論』の頃を転機に、逆に根本有部から影響を受けるようになり、玄奘訳の諸テキストにおける改作に至った、という経緯を物語るとい

う。

しかしこのような指摘は、根本有部をバクトリア・ガンダーラ有部と見なす議論には結びつかない。たとえ「有部の伝承が徐々に根本有部伝承に基づいて改作されてゆく傾向はヴァスバンドウから始まる」(本書七八頁)という本書の主張を認めるとしても、「バクトリア・ガンダーラ有部」つまり『阿毘曇心論』『阿毘曇心論経』『雑阿毘曇心論』(あるいは『甘露味論』)から『俱舍論』へという系譜こそその根本有部伝承の担い手であることが証明されない限り、本書に細説されるカシミール有部と根本有部の複雑な交渉の歴史が、そのままカシミール有部とガンダーラ有部の関係に重ねられるはずもない。にもかかわらず『俱舍論』以外の「バクトリア・ガンダーラ有部」論書は、

この問題をめぐる考察のなかでひとつとして言及されていないのである。

ここまでの検討で明らかのように、本書は「バクトリア・ガンダーラ有部」が経量部であるとか根本有部であるとか言いながら、実はその明白な論拠をただ『俱舍論』のうえにしか見いだしていない。そして『俱舍論』の外形的特徴が『心論』『心論経』『雑心論』を踏襲したものであるから、『俱舍論』の内容的特徴も当然これら三論書に遡りうるであろうと類推しているに過ぎない。

しかも本書はその『俱舍論』における③経量部と根本有部の同一性すら十分に論証していない。つまり『俱舍論』における経量部説と根本有部の要素が、たんに別個に併存しているだけなのか、それとも固有の結びつきをもっているのかという問題さえ検証していない。唯一の例外は、先に挙げたSchmithausen教授の一九八七年論文(『瑜伽論』と根本有部所伝「相心阿含」の関係が指摘されている)を紹介した後述べる「経量部が瑜伽行派の先駆者とされる以上、このことは根本有部と瑜伽行派を結びつけるのみならず、根本有部と経量部をも結びつける」(本書六二頁)という言及である。しかし続いて瑜伽行派と経量部の関係が考察されるわけではない。というよりも、すでに見たように経量部の定義があまりにも曖昧なために、そのような考察は本書には無理なのであろう。

経量部と根本有部を関連づけようとする場合、近年のすぐれた研究の幾つかは、それなりに有効な素材を提供する。たとえ

ば『俱舍論』には「経量部」という名称の由来を示す資料として「ある人々」(ヤシヨミトラ [Woghara ed. p. 3071])によればシユリラータ)の次のような宣言が引かれている。「わたしたちは経を量(基準)とするのであって論を量とするのではない。なぜなら、世尊によって『経を拠りどころとすべきである』と説かれてゐるからである」(sūtraprāmaṇaka vāyana sastrapramāṇakah/ uktaṃ hi bhagavata "sūtrāntapratīśānanāir bhaviṅyam" it/ [Pradhan ed. p. 1463-5])。))で教証として引かれる「経を拠りどころとすべきである」(sūtrāntapratīśānanāir bhaviṅyam)という長阿含『涅槃經』の一句は、現存資料では根本有部所屬文献にしか見いだされな⁵ (śāsmat tarhi ta āanda bhikṣubhiḥ sūtrapratīśānanāir bhaviṅyam na pudgalapratīśānanāir/ Ernst Wardschmidt ed. *Das Mahāparinirvāṇasūtra*, Teil I-III, Akademie-Verlag Berlin, 1950-1951; reprinted ed in 1 vol. by Rinsen Book Co, Kyoto 1986, Text Nr. 43, Vorgang 24.2, 「始今日當依經教、不依於人」『根本有部毘奈耶雜事』卷三七、大正藏二四卷、三八九頁中)(加藤純章『経量部の研究』一〇五—一〇六頁)。また『俱舍論』の引用文献を集めたシヤマタデーヴァの特殊な注釈書『ウパーイカー』(*Abhidharmakośopāyikā*) およびそれに基づく本庄良文の一連の成果は、『俱舍論』の用いた『相応阿含』や律典が根本有部系統のものであった可能性を示唆している(本庄良文「シヤマタデーヴァの伝える中・相応阿含」『佛教研究』十四号、一九八六年)(本庄「シヤマタデーヴァの伝える

る律典」『佛教研究』一六号、一九八七年)。そしてそれら根本有部聖典のなかには、たとえば滅尽定有心説のような経量部(瑜伽行派)ヴァスバンドウの思想と深くかわる経典が含まれている。しかし本書はこういった資料にまったく言及しないまま、乏しい手がかりだけを頼りに仮説を組み立てている。

誤解のないように言っておくが、もちろんこれらの資料を加えれば本書の仮説がただちに説得力をもつというわけではない。まずそもそも根本有部をカシミール有部と明確に区別できるのかという問題がある(榎本文雄「根本説一切有部」と「説一切有部」『印度學佛教學研究』四七一—号、一九九八年)。またかつては経量部の教義を再構成するうえで中心資料とされていた『俱舍論』の「経量部」学説が、実は初期瑜伽行派学説の引用にはかならないことを明らかにした近年の諸研究も考慮されなければならぬ⁶ (Robert Kritzer, *Rebirth and Causation in the Yogācāra Abhidharma*, Wiener Studien zur Tibetologie und Buddhismuskunde Heft 44, Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien Universität Wien, 1999, pp. 202-204)。少なくともこれらの点を踏まえて、根本有部なり経量部なりの実体を再検討しないことには、両者の関係をめぐるといかなる考察も議論に耐えない。

実を言えば評者は、本書を入手して、カパー折り返しの惹句に「本学術書は有部と根本有部の関係に新たな光を当てるとともに、譬喩者および経量部にかんする斬新な視点を提供するであろう」と書かれているのを見たとき、こういった諸問題に対

する何らかの新たな知見が示されているのではないかと密かに期待した。そのためこの第二章をとりわけ興味深く読み進んだのだが、残念ながら期待は失望に終わった。

四

さて、本書の後半は、この第二章で示された構想に基づいて、有部論書を二群に分類して各章に配当する。すなわち第三章では「カシミール系正統派毘婆沙師」に属する諸論書（いわゆる有部七論）を、第四章では「バクトリア・ガンダーラ系有部」（つまり本書の言う「経量部」もしくは「根本有部」）論書を取りあげ、それぞれの文献の資料概況と内容を述べる。

ただし第三章は、前半がアビダルマ研究の方法論的問題を考察する序論と、その考察を踏まえて六足・発智・婆沙の思想史的位置づけを行う総論、後半が個々のテクストの解題を述べる各論、という、それ自身ひとつの完結した構成をもっている。内容は以下の通りである。

第三章 カシミール 正統派毘婆沙師 Chapter Three:

Kāsmīra: Vaibhāsika Orthodoxy

第一節 序論 Introduction 一三八—一三九頁

有部主要論書のインド原典は、完本としてはほとんど現存せず、主に漢訳に拠らねばならない。これらの文献は、後代アビダルマの代名詞となる『俱舍論』の思想的背景を知るうえで重要である。

第二節 コンテクストをめぐる総論 General Contextual Issues

一三九—一六〇頁

【1. Complexities in the Development of Abhidharma Literature and the Emergence of Sects】アビダルマ論書は、個人の著作というより、阿含以来の聖典解釈の積み重ねが次第にたちを整えて成立していったものである。このようなテクスト自身の性格と、歴史資料の欠如というインド固有の事情が、個々の論書の年代的位置づけを困難にしている。現存する文献が、増広や改作を経て生みだされていったであろう多種多様な異本のひとつ（もしくは幾つか）に過ぎない、という点は常に考慮しておくべきである。

【2. Correlation between the Development of Abhidharma and the Emergence of Sects】有部の初期論書の外形的特徴は南伝論書などとも少なからず共通する。また内容面においても、初期の論書には必ずしも有部に固有の教義が説かれているわけではない。たとえば三世実有説は一応「識身足論」に説かれるが、この学説の全体像は『大毘婆沙論』に至るまで明らかにされない。したがって六足論が有部（もしくはその系統）において成立したと断定することはできない。それらは部派が分裂する以前から存在したアビダルマを起源としているのかもしれないし、あるいは他の学派系統で述作された論書を有部が改作して自部派に取り入れたものかも知れない。一方『発智論』以降のテクストは、当初より有部において成立したと見なしてまず差し支えない。

第三節 有部アビダルマ文献 *Sarvastrāda Abhidharma Literature* 一六〇—一七六頁

【1. The Set of Seven Early Sarvāstivāda Abhidharma Texts】有部の七論を「六足・発智」という形式で述べたる最も古い記録は三七九（もしくは三九〇）年に書かれた『八健度論』二四章の後記である。ただし『大毘婆沙論』ですでに『発智論』が根本論書としての地位を確立していることは明らかである。

【2. Relations to Other Abhidharma Collections】『尊婆藪菩薩所集論』は比較的発達した有部教義を伝えており、ひとまず有部所屬と考えられているが、所屬部派の判定は微妙である。『舍利弗阿毘曇論』は明らかに有部論書ではないが、『法蘊足論』やパーリ『分別論』と構造上の類似を示して興味深い。

【3. Dating and Periodization】七論それぞれの成立時期を推定する方法としては、まずテキスト相互の引用に基づいて先後関係を決定していくやり方が考えられる。しかし後代あるいは翻訳段階における挿入や増広の可能性があるため、これも決定ではない。テキスト内の新古の層を定めることがある程度できても、全体をいつの時代の産物と見なすかという問題はそれとは別である。ともあれ、經典をめぐる厳格な教義問答スタイル (strict sutra dialogic style) からより自由な解釈スタイル (freer exegetical style) へという全体的な流れに基づいて、個々の教義をめぐる分析の複雑化や新しい術語の登場といった要素に留意すれば、これらの文献をおおきく四期に分けること

は可能である（四期の分類については本書第一章第三節参照）。
文献解題 *Texts* 一七七一—二五四頁

（以下、本章後半では有部七論および後期論書それぞれの資料概況と内容紹介が述べられるが、紙幅の都合で詳細は割愛させていただきたい。取りあげられる文献は次の通りである）

1. *Abhidhammasaṅgīthaparivāpaḍāsasāstra* 『阿毘達磨集異門足論』
2. *Abhidhammahamaskandhapāḍāsasātra* 『阿毘達磨法蘊足論』
3. *Abhidhammaprajñaptipāḍāsasātra* 『施設論』
4. *Abhidhammaravjānakapāḍāsasātra* 『阿毘達磨識身足論』
5. *Abhidhammahakavyāpāḍāsasātra* 『阿毘達磨界身足論』
6. *Abhidhammaprakāranapāḍāsasātra* 『阿毘達磨品類足論』
7. *Abhidhammajāṇanaprasaṅgasāstra* 『阿毘達磨發智論』（「八健度論」）
8. *The Vibhāṅga Compendia* 毘婆沙系概説書（『鞞婆沙論』『阿毘曇毘婆沙論』『阿毘達磨大毘婆沙論』）
9. *Abhidhammayāsanusāsasāstra and Abhidhammasamayprakti-kasāstra* 『阿毘達磨順正理論』および『阿毘達磨類宗論』
10. *Abhidhammatīpa and Vibhāṅgabhāṣitī* 『アビタルマディーパ』

以上が第三章の梗概である。すでに述べたように、この章はそれ自身で独立した完結性をもっているうえ、扱う範囲がカシミール毘婆沙師の論書に限られているために、内容的にも前章の特異な仮説と直接の関連をもたない。また論述の進め方も前

第二章とは対照的で、主要な関連論文を的確に読みこなしつつ堅実な考察を重ねている。

とくにその前半部では、アビダルマ研究全般にわたる方法論上の問題が総括されており、有益である。初期アビダルマ論書の内容を読解するにあたっては、個々のテクストの述作者が実際に誰であり、どのような思想傾向をもっていたかという問題はさほど大きな意味をもたない。より重視すべきは、その文献がいかなるコンテクストに所属するか、すなわち、それが同時代に幾つか存在したであろう諸異本のどのような系統に属し、どの程度の増広加わったヴァージョンであるか、という点にある。しかし歴史的・地理的な外部資料の少ないインド学分野においては、あるテクストの成立年代や成立地域を推定するための主要な手がかりが、そのテクスト自身のほかには存在しないという循環構造(circularity)は避けがたい。しかも有部のように歴史的にも地理的にもおきな広がりをもった学派に所属する文献の場合、しばしばひとつのテクストに、様々な地域や様々な時代の教義的コンテクストが重層的に織り込まれてしまっており、事態はきわめて複雑である。本章は、アビダルマ研究につきまとうこれら「コンテクストをめぐる諸問題」(contextual issues)をまず列挙する。続いて、有部論書発展史にかんする、必ずしも互いに一致しない従来の諸見解を客観的に紹介しながら、今後の研究に向けて必要な基礎知識を的確に提示している。

このような慎重かつ学問的な態度は、当然のこと前章のいさ

さか短絡的な考察とは相容れない。たとえばすでに見た「マトウラーに発祥した有部がカシミールとガンダーラ(およびバクトリア)に二分化し、後者が経量部、ひいては根本有部になった」という第二章の仮説と、本章における次の記述を比較されたい。

「地理的にいえば、有部はマトウラーおよび北西地方、とくにガンダーラそしてカシミールと結びつきをもつ。どちらの地方にも少なくとも紀元後一世紀には有部が存在していたことは、碑銘の証言するところである。しかしどちらの地方がこの部派の本来の発祥地であったかはいまだ学界における争点のひとつとなっている。アビダルマ論書の述作という面でも重要な意味をもつのは、現存する有部テクストから判断するかぎり、北西地方の広域であり、そこにおいては、地域によってそれぞれ異なる学統(branch)が分立した。毘婆沙系文献においてしばしば多種多様な見解が《カシミール毘婆沙師》《ガンダーラ論師》《外国師》《西方師》といった様々なアビダルマ論師に帰されている事実が、それら諸学統の分立を明白に物語っている。これらのグループの由来、性格、地域は不明であるが、毘婆沙系文献で紹介されるそれぞれの学説に基づいて、その教義の特徴を知ることができる。またそうやって析出された様々な学統の教義的輪郭は、いまだどの系統に由来するかが不明瞭な諸文献の所属を考えるうえで、ひとつの判断材料にもなりうる。ただしこの教義的輪郭を利用して得られ

る実際の効果は、残念ながらきわめて限られている。なぜなら多くの場合、単一のテクストのなにも様々な地域の多様な教義的立場に基づく記述が混在しているからである」(本書一四九—一五〇頁)

この一文からも明らかのように、本章は、結果的には第二章の仮説に対するきわめて正当な立場からの批判となっている。

先に紹介したが、緒言によれば、本書はこの第三章のみが Collet Cox 教授によって執筆されたという。したがってここに見た本章の考え方は Cox 教授のものであり、第二章の仮説は、他の大部分の本文を手がけたという Dessein 博士によるものと考えてよいだろう。

複数の研究者による共同執筆という形式を取る場合、このような同一著作内における記述の矛盾はしばしば避けがたい。しかし本書は、全体として有部アビダルマ研究の「ハンドブック」という体裁をとっている。つまり、初学者や専門外の研究者をも読者として想定する概説書である。しかも執筆分担が明記されていない。にもかかわらず、章ごとの内容がこれほど対立してもよいものか、という疑問は残る。共著者同士が一定の同意に達するまで討議するか、それが無理であるならば、各章の執筆者名を記して論文集の形にするかして欲しかったところである。第三章の内容が充実しているだけに、この点は非常に惜しまれる。

なお本書評では紹介を省略したが、後半の解題も、有部の主要論書に対するすぐれた文献案内となっていることを付言して

おく。

五

最後の第四章では、本書によって「バクトリアおよびガンダーラ有部論書」に分類された諸文献が概説される。

第四章 バクトリアおよびガンダーラ Chapter Four: Bactria and Gandhara

第一節 「心論」系論書 *Heart Treatises* 一五五—二六九頁

『阿毘曇心論』は、おそらく『大毘婆沙論』以前に、バクトリア出身のトカラ人、法勝によって著された。形式的には、十章が四諦説に基づいて、苦諦(界品)、集諦(行品・業品・使品)、滅諦(賢聖品)、道諦(智品・定品)および補論(契経品・雜品・問論品)という順に配列される点、論述が偈頌とそれに対する長行によって進められる点に特徴をもつ。これらの形式はガンダーラ論書『阿毘曇心論経』および『雜阿毘曇心論』に踏襲される。『心論経』はほとんど『心論』の模倣にとどまっているが、『雑心論』になると記述にかなりの増広が加えられる。とくに『大毘婆沙論』から多くの学説が導入されており、カシミール有部からの思想的影響の痕跡を伝える。

第二節 「俱舍論」 *Abhidharma-kosa* 二六九—二七八頁

『阿毘達磨俱舍論』の著者ヴァスバンドゥについては、四世紀説、五世紀説および「二人説」があり今なお決着を見ない。

『俱舍論』は、直接には『雜心論』を手本にして著されたと思われるが、教義内容を比較すると、両者の間には多くの相違点が認められる。この作品が經量部の立場を支持することは広く知られている。

第三節 『甘露味論』 *Abhidhammarāsa* 二七八—二八二頁

『阿毘曇甘露味論』もまた『心論』と一定の類似を見せる。著者はゴーシヤカと伝えられているが、この人物が『大毘婆沙論』における四大論師の一人と同一人物であるならば、『甘露味論』の成立は二世紀頃であり、初期の『心論』系論書の一種であると考えられる。

第四節 『入阿毘達磨論』 *Abhidhammatthāra* 二八二—二八五頁

玄奘の伝承によれば、この論書は『順正理論』と同時期にカシミール近辺で著されたという。内容的にもカシミール有部とは系統の異なる点が認められ、ガンダーラ成立と考えられる。

以上が第四章である。この章は、本書の構想からいえば、これらの文献から經量部思想を取り出し、それを根本有部と関連づけて、第二章に示した仮説の妥当性をより具体的に論証しなければならぬ部分である。したがって、とくに譬喩者との関係が問題となる『雜阿毘曇心論』のダルマトラータや、『俱舍論』の經量部説についての記述が注目される。しかし実際には『俱舍論』が經量部のテキストと認められる以上、同じく偈

頌 (*karika*) と長行 (*bhāṣya*) をもって構成される『心論』系論書もまた經量部の論書であることが確認される(本書二七一頁)とか(『心論経』の著者は)何度もカシミール有部説を名指しで引用する。したがってかれ自身はカシミール有部論師ではなく、ガンダーラ出身の外国師、すなわち経部師であったと思われる(二五九頁)とか『入阿毘達磨論』が經量部の論書である事実は、この論書に多くの阿含が引用される事実によって証明される(二八四頁)といった、第二章と同じ主張が繰り返されるばかりである。さらに『雜阿毘曇心論』で譬喩者説が否定的に引用される事実については「この譬喩者とはダルマトラータ自身がかつては所屬し、後にそこから離脱した学派である(二六五頁)と述べるが、それでは『雜心論』の立場を經量部から遠ざけることになってしまうのではないだろうか。また、四諦説を規範とする点で『心論』系論書と構成上の類似をもつ(そして譬喩者との思想的関連が注目される)ハリヴァールマンの『成実論』は、本書の主張にとって格好の素材を提供しそうな文献だが、言及すらされないのはなぜか、逆に『入阿毘達磨論』がここに紹介される必然性はどこにあるのか、などなど、他にも疑問点が多いが、この辺で止めておこう。要するに本章は、第二章の仮説がいかに根拠に乏しいものであるかを自ら証明してしまっている。ただそれ以外の部分、つまり個々のテキストの内容紹介にかんする限りは、とりあえず妥当な内容となっている。

六

概説書であるからといって、必ずしも大胆な新説を避け、穏当な定説ばかりを並べなければならぬわけではない。むしろ、独創的な解釈に基づいて、当該の研究領域全体にこれまでとは異なる角度から光を当ててみせるような著作こそ、真にすぐれた概説書と言えるかも知れない。ただしその新たな解釈は、従来の研究成果が投げかける疑問によく応えうる堅実さをそなえたものでなければならぬ。

本書の狙いは有部の文献を総合的に考察するための斬新な視点を示すことであつたと思われる。しかし残念ながら第二章に述べられた仮説は、今日におけるアビダルマ研究の水準には届いておらず、稚拙な思いつきの域を出ていない。逆にそのような仮説を組み立てる以前の問題として、現存資料から有部アビダルマ思想史を描き出すにあつての方法論的課題を仔細に指摘した第三章が、本書のなかで最もすぐれている。本書自身の意図とは反するかもしれないが、以上が評者の率直な読後感である。

第三章は、有部の歴史の実像を再現するために必要な留意点や問題点について、適切な忠告と助言を読者に与える。これは方法論的考察にすぐれた欧米の学界ならではの成果と言える。漢訳有部論書の個別的研究が進み、それらの異本と思われるサンسكريット写本や未証定の断片が次々に報告され、資料の系統的把握が複雑化しつつある現在、有部アビダルマの概説書に

必要とされるのは、このような基礎的な方法論の再確認と検証ではないだろうか。本書第三章をひとつのきっかけに、同種の試みが今後も現れることを期待したい。(Apr/1/2000)

Charles Willemen, Bart Dessein, Collett Cox, *Sarvasivva-
da Buddhist Scholasticism* Handbuch der Orientalistik, II
Indien, Band 11, Brill 1998
ISBN 9004102310